ペルシア語文化圏における十二支の年始変容について

――ティムール朝十二支考――

諫早庸一

【要約】十三世紀初頭のモンゴル侵入は、ペルシア語文化圏に甚大な影響をもたらした。一方で侵入者がこの文化圏に特有のイラン的要素から受けた影響もまた大きい。こうしたテュルク・モンゴルとイランとの相互作用を十二支という「とき」から検討する。この世界における十二支は当初、中国暦の年始である立春から始まっていた。しかし十二支の始まりはやがて、当時は春分にあたっていたイランの「とき」の始まりであるノウルーズへと移動する。年始変容の所以は、ティムール朝期にイランの行政官たちが、支配者であるテュルク・モンゴルの十二支を、自らが徴税に用いていたハーン暦と同じ春分年始のものとして理解したことにあった。テュルク・モンゴルの「とき」であった十二支は、イランの「とき」の始まりと結びつき、広くペルシア語文化圏の人々の「とき」となっていく。この事実は、両者が係わり合ったティムール朝の行政構造が、文化接触に果たした役割を物語る。

史林　九一巻三号　二〇〇八年五月

はじめに

十三世紀初頭のモンゴル侵入は、ペルシア語文化圏に甚大な影響をもたらし、その影響は政治・文化の領域に広く及んだ。そもそもこの文化圏が拡大し、イラン・中央アジア・インドにまたがる広大なものとなっていく契機は、モンゴル帝国においてペルシア語が公用語的な地位を占めたことにある。[1] ただし、侵入したテュルク・モンゴルの側もまた、この文

化圏に固有のイラン的要素から多くの影響を受けることとなった。従って、モンゴル侵入期以降のペルシア語文化圏において、テュルク・モンゴルとイランとの相互作用は極めて重視され、それについての幾多の研究を生み出してきた。[2]

本論はテュルク・モンゴルとイランとの混淆を「とき」の観点から見る試みである。モンゴル侵入期以前に近世ペルシア語で書かれた文献、特に宮廷史家の手になる文献の殆どは、日付にイスラームの「とき」であるヒジュラ暦を用いていた。[3]その状況がこの時代に、モンゴル帝国暦の出現によって覆されることになる。従ってモンゴル侵入期は、「とき」の観点から見てもペルシア語文化圏の一大転換期と言うことが出来る。

「とき」の中でも、本論では特に十二支に注目する。ペルシア語文化圏において「とき」もまた、テュルク・モンゴルとイランとの混淆を反映し、変容していく。それを如実に表すのが、十二支なのである。十二支は、ペルシア語史料の中では「テュルク年（Sāl-i Turkī）」や「テュルク暦（Tārīx-i Turkī）」、「モンゴル年（Sāl-i Mugūl）」と呼び表され、十三世紀のモンゴル侵入以降にこの言語で記されるようになる。十二支は当初、中国暦法に則ったモンゴル帝国暦の年表記としてこの文化圏にもたらされた。そのため、当然十二支は中国暦の年始にあたる立春[4]より始まっていたのであるが、しかしそれは、ペルシア語文化圏においていつからか一ヶ月半ほど年始を後退させ、当時は春分にあたっていた、イランの「とき」の始まりであるノウルーズから始まるようになる。[5]つまりテュルク・モンゴルの「とき」であった十二支が、イランの「とき」の始まりであるノウルーズに年始を置くようになるのである。テュルク・モンゴルがもたらした十二支を、イラン側は自らの「とき」の一部として取り込んでいく。このような文化受容の過程や要因を明らかにすることで、テュルク・モンゴルとイランとの文化接触の諸相を垣間見ることが出来ると考える。

後で詳しく述べることになるが、先行研究から、十二支の年始の変容の解明にとってティムール朝期が非常に重要な時代であることが分かってくる。ティムール朝（一三七〇―一五〇七年）[6]は、モンゴル侵入以降に進行した、ペルシア語文化圏におけるテュルク・モンゴルとイランとの混淆が、特徴的な形で現れる王朝である。例えば、王朝の創始者ティムール

十二支	テュルク語	モンゴル語
ネズミ年	sīčqān	qūlqana
ウシ年	ūd	hūkār
トラ年	bārs	bārs
ウサギ年	tawišqān	tawlay
タツ年	luy	luy
ヘビ年	īlān	mūǵāy
ウマ年	yūnt	mūrīn
ヒツジ年	qūy	qūyin
サル年	bīčīn	bīčīn
トリ年	tāqūq	
イヌ年	īt	
ブタ年	tankūz	

の成功は、テュルク・モンゴル遊牧民の軍事力とイラン定住民の経済力との交錯に帰せられる。[7] そしてティムール朝の歴史的・文化的位置は「イラン・イスラーム文化」と「テュルク・モンゴル文化」の交差点にあるとされるのである。[8]

しかし、ティムール朝における両者の混淆については、まだまだ未解明な点が多いと言わざるを得ない。具体的には、モンゴルの慣習法であるヤサとイスラームの聖法であるシャリーアとの関係[9]や、両者が複雑に関わりあったと見られている王朝の行政機構の問題[10]など、重要な課題が多く残されている。これらの問題の解決を困難にしている主な要因は、史料の偏りにある。我々に残されたこの時期の史料のほとんどがムスリム知識人によって書かれたものであり、[11] 彼らに馴染みの無いテュルク・モンゴル側において欠けていることが多いのである。

従って、本論はより具体的には、ティムール期におけるテュルク・モンゴルとイランとの混淆の諸相を「とき」という新たな観点から見ようとする試みであり、この観点から同朝史研究を進展させることをも志向するものである。「とき」は歴史叙述に必須な要素であり、そのため「とき」を表す十二支はテュルク・モンゴル的要素でありながらも、史料に継続して記される。十二支をテーマとすることにより、比較的多くの材料から混淆を分析することが可能なのである。十二支を追うことで混淆の諸相を垣間見、ティムール朝史研究に新たな視座を提供したい。

なお、本論で扱う十二支とは、中国で用いられる数記号ではなく、ネズミ、ウシ、トラ、ウサギ、タツ、ヘビ、ウマ、

ヒツジ、サル、トリ、イヌ、ブタといった十二の動物でもって一周期を形成し、それによって「とき」を表すもののことで、数表記の十二支と区別して十二獣環などと呼び表されることもある。ペルシア語史料の中で十二支は、右の表のように、テュルク語彙もしくはモンゴル語彙によって表現される。さらに、それぞれの動物名の後にテュルク語で「年」を意味する yīl が付される。[12]

本論で使用した主要史料の略称は以下の通り（右が本文中の略称、左が引用中の略称である）。

『テュルク諸語集成』Maḥmūd Kāšġarī, *Dīwān Luġāt al-Turk*.

・**Kāšġarī-facsim,** (facsims.), *Dīvānü lügati't-Türk*, Ankara, 1990.

『イルハーン天文表』Naṣīr al-Dīn al-Ṭūsī, *Zīj-i Īlxānī*.

・**Ṭūsī-ms, Cairo DMF 1.**[13]

『集史』Rašīd al-Dīn Faḍl-Allāh Hamadānī, *Jāmi' al-Tawārīx*.

・**Rašīd-Rawšan,** M. Rawšan, & M. Mūsawī (eds.), *Jāmi' al-Tawārīx*, 4vols, Tihrān, 1373/1994-95.

『勝利の書（シャーミー）』Niẓām al-Dīn Šāmī, *Ẓafar-nāma*.

・**Šāmī-Tauer,** F. Tauer, *Histoire des conquêtes de Tamerlan intitulée Zafarnāma par Nizāmaddīn Šāmī avec des additions empruntées au Zubdatu-t-tawārīḫ-i Bāysunġurī de Ḥāfiẓ-i Abrū*, tome I, Praha 1937.

『ムイーン史選』Mu'īn al-Dīn Naṭanzī, *Muntaxab al-Tawārīx-i Mu'īnī*.

・**Naṭanzī-Aubin, J.Aubin,** *Extraits du Muntakhab al-tawarīkh-i Mu'īnī* (*Anonyme d'Iskandar*), Tihrān, 1957.

『勝利の書（ヤズディー）』Šaraf al-Dīn 'Alī Yazdī, *Ẓafar-nāma*.

・**Yazdī-'Abbāsī,** Muḥammad 'Abbāsī (ed.), *Ẓafar-nāma*, 2vols, Tihrān, 1957.

・**Yazdī-Urunbaev,** А. Урунбаев, *Шарафаддин 'Али Йазди, Зафар-наме*, Ташкент, 1972.

『歴史精髄』 Ḥāfiẓ-i Abrū, *Zubdat al-Tawārīx-i Bāysunġurī.*

· **Ḥāfiẓ-Tauer,** яФ НафдсХ *Histoire des conquêtes de Tamerlan intitulée Zafarnāma par Nizāmddīn Šāmī avec des additions empruntées au Zubdatu-t-tawārīh-i Bāysunġurī de Hāfiz-i Abrū,* tome II, Praha 1956.

· **Ḥāfiẓ-Jawādī,** Sayyid Kamāl Ḥajj Sayyid Jawādī (ed.), *Zubdat al-Tawārīx,* 4vols, Tihrān, 1380/2001.

『スルターン・キュレゲン天文表②』 Uluġ Beg, *Zīj-i Sulṭānī-yi Gūrkānī.*

· **Uluġ Beg-Sédillot,** L.P.E.A. Sédillot, *Prolégomènes des tables astronomiques d'Ouloug-Beg,* Frankfurt, 1998. (first., Paris, 1847)

· **Uluġ Beg-ms,** Bodleian Library 548.

『ハサン集史』 Tāj al-Dīn Ḥasan b. Šihāb Yazdī, *Jāmi' al-Tawārīx-i Ḥasanī.*

· **Ḥasan-Afšār,** Īraj Afšār (ed.), *Jāmi' al-Tawārīx-i Ḥasanī,* Karachi, 1987.

『ヤズド新史』 Aḥmad b. Ḥusayn b. 'Alī al-Kātib, *Tārīx-i Jadīd-i Yazd.*

· **Aḥmad- Afšār,** Īraj Afšār (ed.), *Tārīx-i Jadīd-i Yazd,* Tihrān, 1345/1978.

『両星の上昇』 'Abd al-Razzāq Samarqandī, *Maṭla'-i Sa'dayn wa Majma'-i Baḥrayn.*

· **Samarqandī-Nawā'ī,** 'Abd al-Ḥusayn Nawā'ī (ed.), *Maṭla'-i Sa'dayn wa Majma'-i Baḥrayn,* 2vols, Tihrān, 1353-1383/1974-2004.

『アクバル全典』 Abū al-Faḍl b. Mubārak, *Āyīn-i Akbarī.*

· **Abū al=Faẓl-Blochmann,** H. Blochmann (ed.), *Āyīn-i Akbarī,* 3vols, Frankfurt, 1993. (first., Calcutta, 1872-77)

『アッバース大帝紀』 Iskandar Beg Turkmān, *Tārīx-i 'Ālam-ārā-yi 'Abbāsī.*

· **Iskandar-Afšār,** Īraj Afšār (ed.), *Tārīx-i 'Ālam-ārā-yi 'Abbāsī,* 2vols, Tihrān, 1350/1971-72.

① 近藤信彰「イラン、トゥラン、ヒンドーペルシア語文化圏の発展と変容」『岩波講座世界歴史 14 イスラーム・環インド洋世界 16-18世紀』岩波書店（二〇〇〇年）、九三―九四頁。

② 安藤は十三世紀以降の東方イスラム世界史を動かしたファクターとしてスーフィー教団に加えて「トルコ・モンゴル的要素」と「イラン文化」を挙げている［安藤志朗「王朝とスーフィー――ジャームのシャイフの場合」『西南アジア研究』四一（一九九四年）、一頁］。モンゴルのアミールとイランのワズィールによるこの文化圏の統治のあり

様を描いたオバンは、この相互的な影響を「二重の異文化受容（double acculturation）」と表現する［Aubin, J., *Émirs mongols et vizirs persans dans les remous de l'acculturation*, Paris, 1995, p. 9］。元朝中国とイルハーン朝イランとの文化交流（cultural exchange）は、オルセンによって医術・農業・天文学といった様々な文化要素から明らかにされている［Allsen, T.T., *Culture and Conquest in Mongol Eurasia*, New York, 2001］。

③ 実際には、イスラーム化以後もイランの地ではヒジュラ暦以外の暦が使われ続けていた。イスラーム期イランの暦については［"TĀRĪKH", *The Encyclopaedia of Islam; New Edition(EI2)*, Leiden, vol.10, 1998, pp. 261-263］を参照されたい。

④ もちろん中国暦は太陰太陽暦であるため、正月一日と立春とが合致するわけではない。従って年始は立春ではなく、「立春のころ」にある。正確に言えば漢代以降、中国暦の年は冬至を含む月の翌々月から始まっていた［薮内清『歴史はいつ始まったか』中央公論社（一九八〇年）、七六―七七頁］。しかし本論では便宜上、中国暦に則った十二支の年始を立春と表現する。中国暦法に関しては［薮内清『中国の天文暦法』（増補改訂）平凡社（一九九一年）］を参照されたい。

⑤ セルジューク朝君主ジャラール・アッディーン・マリクシャーによって施行された、西暦一〇七九年を暦元とするジャラーリー暦が春分を年始として以降、イランの「とき」の始まりであるノウルーズは春分に固定された［"DJALĀLĪ", *EI2*, vol.2, 1965, p. 398］。

⑥ 本論の年代表記は、ヒジュラ暦／西暦の順であり、「／」記号なしに用いられる年代は特に明記の無い限り西暦となっている（ただし引用部・文献表においてはこの限りではない）。

⑦ 間野英二『中央アジアの歴史』講談社（一九七七年）、一六八頁。

⑧ 加藤和秀『ティームール朝成立史の研究』北海道大学図書刊行会（一九九九年）、三二九頁。

⑨ これに関しては、川口が「ティムールとヤサ」と題する論考で、ティムール期を中心に論じている［川口琢司『ティムール帝国支配者層の研究』北海道大学出版会（二〇〇七年）、一六六―一八四頁］。

⑩ 議論の一端を［川口 2007: 116-117 (n. 10); Manz, B.F., *Power, Politics and Religion in Timurid Iran*, Cambridge, 2007, pp. 79-80］から窺い知ることが出来る。

⑪ ティムール朝史料の執筆者及び彼らの相互関係について、一四二〇年に没したハーフィズィ・アブルーまではウッズの論考［Woods, J.E., "The Rise of Tīmūrid Historiography", *Journal of Near Eastern Studies*, 46/2, 1987, pp. 81-108］を、シャールフ期以降についてはマンツの論考"Issues of sources and historiography"［Manz 2007: 49-78］を参照されたい。

⑫ ただし、それぞれの動物名の表記にはバリアントが存在する。稀に sal-i mūš（ネズミ年）のように、ペルシア語彙で表現される場合もある［cf. Doerfer, G., *Türkische und mongolische Elemente im Neupersischen: unter besonderer Berücksichtigung älterer neupersischer Geschichtsquellen, vor allem der Mongolen- und Timuridenzeit*, Wiesbaden, 1963-1975, IV, p. 246］。

⑬ 本論で用いた『イルハーン天文表』と『スルターン・キュレゲン天文表』の写本は、矢野道雄氏が収集なさったものであり［cf. 矢野道雄『イスラム精密科学史資料収集』（平成八年度科学研究費補助金研究成果報告書）一九九七年、十九頁］、それを氏のご厚意により複写させていただいた。ここに記し、謝意を表す。

⑭ ウルグ・ベクの名で叙述されたこの天文表は、様々な名称で呼ばれている［cf. Storey C.A., *Persian Literature : a bio-bibliographical survey*, 2-1, 1958, pp. 67-68］。本論では最も古い年代記での言及に従

い同書を『スルターン・キュレゲン天文表』と呼ぶ。

第一章　ペルシア語文化圏における十二支の導入と年始の変容

第一節　十二支の導入と変容

十二支の起源は不明確ながら、[1]中国北方の草原地帯において六世紀に強盛となった突厥が十二支を用いていたことは確実であり、それ以降、テュルク・モンゴルによって十二支がペルシア語文化圏にもたらされるまでの過程については、バザンによるテュルクの「とき」についての優れた論考の中で既に論じられているので、[2]ここではそれを再記することはしない。重要なことは、テュルク・モンゴルは中国暦に則った立春年始の十二支をペルシア語文化圏に伝えたということである。

以下で、ペルシア語文化圏にもたらされた中国暦に則った立春年始の十二支が、その中で年始を春分へと変容させていく様子を記す。まずモンゴルがイランに立てた王朝であるイルハーン朝（一二五六―一三三六年）の史料では十二支の年始が立春にあったことが、同王朝史料に記載される十二支を研究したメルヴィルの論考[3]より明らかである。メルヴィルは、イルハーン朝史料において十二支が使われる場面のほとんどが、モンゴルの支配階層の活動に関するものであることから、十二支が実際にイランの地でモンゴルに使われており、歴史家たちも彼らの口伝に拠ったことが明らかであるとする[Melville 1994: 85]。立春にあたる年始にはテュルク語とペルシア語の合成でもってkünyangilāmīšī と表現される新年祭がテュルク・モンゴルによって祝われていた。[4]その事実を如実に表すのが『集史』の以下の記述である。

> アフマドは、クンクルタイやアルグンたちの企みを知り、新年祭（**kūnyangilāmīšī**）前の或る日、自分の婿であったアリナクの家に行った。そして彼に指示した結果、彼は翌日早朝にクンクルタイのところに行き、クンクルタイを捕らえ、アフマドの許

に連れて来た。六八二年シャウワール月二十六日（一二八四年一月十七日）のことであった。アリナクはアフマドに言った。「スルターンは心安らかでなくてはなりません。私がアルグンをも同じように生け捕りにして御前に連れてきましょう」と。アフマドはアリナクに恩賞を与え、十分な庇護を加え、尊重し、軍隊を委ねた。**翌日、サル年の初めの新年祭の早朝（bāmdād-i kūnyangilāmīšī sar-i sāl-i bīčīn yīl）**、アッラーンのカラバーグにおいてクンクルタイのことを片付けた。

[Rašīd-Rawšan: 1133-34; 本田 1991: 445-446]

この記述から「サル年の初め新年祭」が一二八四年一月一八日に催されていることが分かる。そしてこの期日は、当時の中国の官暦であった授時暦[5]の甲申の年始とほぼ一致するものである[6]。

しかし、サファヴィー朝史料である『アッバース大帝紀』の著者イスカンダル・ベクは、シャー・アッバースの治世（一五八七―一六二九年）について記す第二巻[7]の冒頭で、第二巻の記年を「テュルク年」すなわち十二支で行なうと宣言し、その理由を以下のように語る。

もし歴史家たちのように、アラブの慣習でもってその年始がムハッラム月の初めであるところのヒジュラ年を採用すれば、大部分のイランの民（ahl-i ʿAjam）は理解できないであろう。**なぜならテュルクやイランの民の間では、年始は世界を彩る春の初めにあたるスルターンのノウルーズであるからである（zīrā ki dar miyāna-yi Atrāk wa ahl-i ʿAjam mabdaʾ-i sāl nawrūz-i Sulṭānīst ki awwal-i bahār-i ʿālam-ārāst）**。四季が巡り、次のノウルーズになるまでで一年である。ムハッラム月はテュルク年（sāl-i Turkī）の期間内の［いずれかに］あたる。

[Iskandar-Afšār-I 379; McChesney 1980: 56-57]

このように、十二支の年始が「ノウルーズ」即ち春分にあることが語られるのである。さらにこの『アッバース大帝紀』以外にも、この時期の史料にはノウルーズから始まる十二支を記すものがあることが報告されている[8]。これらの事実から、シャー・アッバース期には、十二支はイランやテュルクの人々の間で普及しており、その年始は春分＝ノウルーズにあるものとなっていたことが分かる。

第二節　先行研究

ペルシア語文化圏における十二支の年始変容の事実は以前より知られており、その時期と所以は先学の論ずるところである。先行研究はそれぞれ有益なものであるが、しかし最終的な結論に関しては承服することは出来ない。[9] 以下で十二支の年始変容について論じたものの中でも特に学ぶところの多いメルヴィルの議論を紹介する。

メルヴィルは十二支の年始の変容について、はっきりとは分からないとしながらも、示唆的な議論を展開する。彼は年始の変容を十四世紀中のこととする。その理由として彼は以下の三点を挙げる。

① ティムール朝前期[10]の史料である『勝利の書（ヤズディー）』は確実に、『勝利の書（シャーミー）』はおそらく春分年始の十二支が記されている。

② 一三六八年には元朝が中原から放逐されている。

③ イルハーン朝ガザン・ハーンが一三〇二年に財務暦として春分年始のハーン暦を施行している。

彼は、十五世紀半ばに著されたウルグ・ベクの『スルターン・キュレゲン天文表』[11]における中国暦の記載に留意しながら[12]、ティムール朝初期の史料には春分年始の十二支が記されていると判断することで、春分年始の十二支を記すサファヴィー朝以前にペルシア語文化圏を支配したティムール朝の史料においても十二支は春分年始であるとし、十二支の年始変容をそれより前の時期にまで遡る。[13] そして論証することが出来ないとしたうえで、西方のモンゴルの支配地において十二支を用いた帝国暦（imperial calendar）が破棄されたのは、一三六八年における元朝の中原からの放逐と軌を一にするのではないかとしている。さらに変容の第一段階として、イルハーン朝のガザン・ハーンのイスラーム改宗に続く、七〇一年ラジャブ月十二日／一三〇二年三月十三日のハーン暦の施行を挙げる。ハーン暦は、太陰年であるヒジュラ年と農事の基準となる太陽年の相違によって生じた財政上の難事を解決するために彼が施行した財務暦であり、ノウルーズを年始に

置く太陽暦であった。メルヴィルは、ティムール朝中期の史料である『ハサン集史』においてこの暦が十二支とともに用いられていることを述べ、ハーン暦が十二支の年始変容に影響を与えた証拠としている［Melville 1994: 93］。

そして、メルヴィル自身も他の箇所で述べていることであるが［Melville 1994: 92-93］、イルハーン朝史料に見られる十二支と、その後の史料に見られる十二支とでは表記のされ方が異なる。具体的には先程の『集史』の引用にあるように、イルハーン朝史料に見られる十二支は、「ヒツジ年十一月一日」というように、十二支に加えて中国暦に準じた月日をも記述することがある。しかしこれ以後の史料では十二支が月日を伴うことはない。例えばティムール朝史料には以下のように記される。

アミール・サーヒブ・キラーン（ティムール）は大軍とともに**七八一年にあたるヒツジ年の春初め（awwal-i bahār-i qū yīl muṭābiq sana-yi ʾiḥdā wa ṯamānīn wa sabʿumiʾa）**にホラズムへ向かった。そしてエスキ・ウキュズ運河を越え、都市の郊外に下馬した。

［Naṭanzī-Aubin: 303-304］

「七八一年にあたるヒツジ年の春初め」とここでは月日は記されていない。他の記述も同様であり、十二支がはっきりと中国暦に則って運用されていることが分かるのはイルハーン朝期までである。

メルヴィルは、『集史』がイスラームに改宗したガザン・ハーンの治世の記述において十二支を使用しなくなることを指摘している［Melville 1994: 93］。従って、このような記載の変化の理由は、メルヴィルが十二支の変容の所以として先に挙げたイスラーム改宗と帝国暦の撤廃にあると思われる。イスラーム国家の為政者が用いる「とき」はヒジュラ暦であり、イスラーム改宗にともなって帝国暦は廃れていった。ヒジュラ暦の採用と帝国暦の撤廃により、中国暦に基づいていた月日は使用されなくなったのである。ただし、ここで問題となるのはあくまで、このような帝国暦の破棄が、年始の変容とイコールなのかということである。結論から言うとイコールではない。メルヴィルの議論には問題があるのである。具体的には、①のティムール朝史料に見られる十二支に関する議論に問題がある。次章でメルヴィルの議論の問題点を指摘し、

ティムール朝の十二支について検討する。

① 広域に伝播した十二支の起源がどこにあるのかについては、様々な研究者たちが論ずるものの未だに定説は無い。これらの議論の一部は、[桜一雄「セデス氏『カムボジャに於ける十二獣環の起源』」『東洋学報』一二三／四（一九三六年）、一三二―一三四頁; Doerfer 1963-1975: IV247-248] に記されている。

近年の研究に関して、工藤の論考によれば、出土文物より、中国での十二支の使用は少なくとも戦国時代まで遡れるようであり、かなり古くから十二支がこの地で用いられていたことは間違いない [工藤元男『睡虎地秦簡よりみた秦代の國家と社會』創文社（一九九八年）、二三四頁]。ただ、フォン・リーフェンは二〇〇五年のシンポジウムにおいて、十二支がエジプトの黄道十二宮（Dodekaoros）の影響によって成立したことを述べており、西方起源説も依然として根強い [von Lieven, A, "From Crocodile to Dragon History and Transformation of the Dodekaoros (draft, to be expanded and provided with footnotes)", *The Transmission and Appropriation of Astral Sciences in Pre-Islamic Times (Symposium)*, Berlin, 2005]。

フォン・リーフェンの報告については矢野道雄氏のご厚意によりそのレジュメをいただくことが出来た。この場に記すことで、謝意を表す。

② Bazin, L., *Les systèmes chronologiques dans le monde turc ancien*, Budapest, 1991, pp. 117-152, 402-404.

③ Melville, Ch., "The Chinese-Uighur Animal Calendar in Persian Historiography of Mongol Period", *Iran: Journal of the British Institute of Persian Studies*, 32, 1994, pp. 83-98.

④ このような、語尾に mišī を有し、ペルシア語では訳しきれない、テュルク・モンゴル的概念を表現する術語に関しては、本田の「モンゴル・トルコ語起源の術語―語尾 mišī をもつもの」なる論考がある [本田實信『モンゴル時代史研究』東京大学出版会（一九九一年）、四〇五―四五六頁]。

⑤ 一二八一年より施行された元朝の官暦である。十分な天文観測に基づいて作成された非常に優秀な暦であり、明代の大統暦もほとんどそのままこの暦を受け継いだため、結果として実に四百年の長きに亘って用いられた。これだけ長期間用いられた中国暦は他に無い [薮内 1991: 136-145]。

⑥ ペルシア語文献に記される立春年始の十二支は、中国の官暦とは若干異なることが知られている。具体的な相違点については [今井溱「Ulugh Beg表の畏吾児暦」『西南アジア研究』八（一九六二年）、二九―三七頁] を参照されたい。

⑦ 『アッバース大帝紀』は三巻からなるとされている。それぞれの巻は「第一の書（ṣaḥīfa-yi awwal）」、「第二の書（ṣaḥīfa-yi duwwum）」、「第三部（maqṣad-i duwwum）」と呼ばれる。元来イスカンダル・ベクは第二巻を二部構成にする予定であったのだが、第二巻二部の完成が、第一部の十四年後と、かなり遅れた上に、第二部には独自の序文が付されているため、第二部は個別の巻として扱われるようになった [McChesney, R.D., "A Note on Iskandar Beg's Chronology", *Journal of Near Eastern Studies*, 39/1, 1980, p. 56]。

⑧ 例えばマクチェスニーは、カーディー・アフマド・クミーによってシャー・アッバースに献呈された『歴史の精髄（Xulāṣat al-Tawārīx）』も、春分を年始とする十二支によって年が記されていることを伝える [McChesney 1980: 61-62]。加えて後藤は、ギーラーンの地方年代

記もまたサファヴィー朝領に併合された一〇〇六／一五九七―八年からは春分年始の十二支を用いることを伝える［後藤裕加子「サファヴィー朝ムハンマド・フダーバンダ時代の宮廷と儀礼」『西南アジア研究』六一（二〇〇四年）、三八頁］。

⑨ 例えばバザンも十二支の変容の時期に言及しているが、彼はサファヴィー朝史料に既に春分年始の十二支の事例が見られることに気付いておらず、年始変容時期を十八世紀以降としている［Bazin 1991: 410-412］。

⑩ 本論で用いるティムール朝史料の時代区分はウッズの区分に依拠している。彼は前期をハーフィズィ・アブルーが没する八三四／一四三〇年までとし、中期を八三四―七五一／一四三〇―七〇年に、後期を八七五―九一五／一四七〇―一五一〇年に置いている［Woods 1987: 82］。

⑪ 天文表（Zīj）とは、イスラーム天文学の知識が凝縮された書物であり、具体的には暦や三角法、天体運行について記述されている。さらに「表」の名が表すように、説明のための多くの表を含む。天文表はイスラーム文化圏においてアラビア語やペルシア語で二百以上著されるが、中でもティムール朝第四代ウルグ・ベクによって著された『スルターン・キュレゲン天文表』は影響力の強いものであった［"ZĪJ", *EI2*, vol.11, 2002, pp. 496-504］。

⑫ 確かに、この天文表において「ヒタイ・ウイグル暦（Tārīx-i Xitā wa Uygūr）」の名で中国暦が記されている［Ulug Beg-Sédillot: 314-337; Ulug Beg-ms: 5r-10v］。しかし、この事実によって当時中国暦がペルシア語文化圏で未だに用いられていたとすることは出来ないと考える。この天文表にみられる中国暦は、十三世紀に記された『イルハーン天文表』の中に見られるヒタイ暦（Tārīx-i Qitā）に即したものであり、『スルターン・キュレゲン天文表』に記される中国暦はペルシア語文化圏で用いられていた暦ではなく、純粋に学術的な関心でもって『イルハーン天文表』から移入されたものだと思われる。両天文表における中国暦の記し方の相違もそれを裏付けるものとなっている。具体的には、『イルハーン天文表』に見られる「我らの帝王たちが［ヒタイ暦を］使っている」［Ṭūsī-ms: 3v］という表現や、「その年は、ヒタイの言葉で葵酉（kūy-yūw）、テュルクの言葉でトリ年（dāqūq yīl）である。」［Ṭūsī-ms: 6v］という十二支と中国暦の六十干支との関連を示す記述が『スルターン・キュレゲン天文表』では削除されている。これらのことから『スルターン・キュレゲン天文表』に記される中国暦は、当時ペルシア語文化圏で使われていた暦を反映したものではないことが分かる。

⑬ ただし、『歴史精髄』の中では、春分年始の十二支の使用を暗示させる箇所がある一方で、モンゴルの新年祭についての言及があり、しかもいずれの記年も不正確であることから、この時期において少なくともある種の不確実性が存在していたことは間違いないとしている［Melville 1994: 93］。

第二章　ティムール朝史料における十二支の年始

第一節　「春」の概念

メルヴィルは、ティムール朝史料の十二支をくまなく調べたわけではない。彼ははっきりと記してはいないものの、明らかに、ある一つの前提に基づいて十二支の春分年始を演繹している。それが「『春』は春分から始まる」という前提である。彼はこの前提から始まる以下の三段論法でもってティムール朝の十二支が春分年始であると結論付けていると思われる。

「春」は春分から始まる。

←

十二支が「春」から始まっている記述が見られる。

←

この時期の十二支は春分から始まる。

しかし、この「『春』は春分から始まる」という前提は極めて疑わしい。そもそも「季節感」というものはそれぞれの地域・民族によって異なるものであり、それは四つに分かたれるものとも限らない。[1] 春分から始まるという「春」概念は、春分にノウルーズ、年始を置くイラン特有のものであり、テュルク・モンゴルのものではない。例えば初期モンゴルの根本史料である『元朝秘史』における四季は中国のものに準じている。具体的には中国暦の一月から三月が「春」にあたっ

ている。[2] さらに先程の天文表においても中国の春とイラン地域の春の時期が違うことが述べられている。

我々の一年における季節の始まりは、彼ら（中国の民）の季節の真ん中にある。例えば春の季節の始まり（awwal-i faṣl-i bahār）は、彼らの間では宝瓶宮（グレゴリウス暦一月二十一日―二月十八日）の半ばほどのところにある。二至二分は彼らの季節の真ん中にくる。

[Uluġ Beg-Sédillot: 320; Uluġ Beg-ms: 6r]

従って、支配層を形成していたテュルク・モンゴルによる伝承が、多くの記述の典拠となっていた当時のペルシア語文献において、そこに見られる「春」をイラン的なものとすることに関しては疑問である。さらに、メルヴィルが自らの議論の補強として挙げた以下の記述は、逆に彼の議論の誤りを決定付けるものとなっている [Melville 1994: 97 (n. 65)]。

（寒さによって）多くの人々とかなりの駄獣が死んだので、サーヒブ・キラーン陛下は慈悲と同情によってそこから撤退することを命じた。そして二ヶ月の間サマルカンドに留まると、厳しい寒さが和らいだ。そこで再び**ウサギ年の前期にあたるシャウワールの新月の月曜日（dūšanba-yi ġurra-yi šawwāl muwāfiq awā'il-i tūsqān yīl;** 一三七五年三月五日）に、決意の剣先を鋭くすると、常勝軍を整えて閲兵し、ジャタの方へ向かった。

[Yazdī-Abbāsī: I 188-189]

この記述は一三七五年三月五日の記述である。ウサギ年は一三七五年から始まり、この年の春分は三月十二日であるから、[3] 春分よりも前に「ウサギ年の前期」が来ていることになる。よってこの記述は十二支が春分年始であることの証左ではありえず、むしろその否定を示すものである。

このように、少なくともメルヴィルの議論からは、ティムール朝期には十二支の年始は春分へと変わっているという結論を導くことは出来ない。このことから、年始の変容の解明のためには、ティムール朝史料に見られる十二支の総合的な検討が必要であることが理解される。

ティムール朝史料に見られる十二支を検討したところ、ティムール朝期の中でも、王朝の創始者ティムールの時代と、

その実質的な後継者であるシャールフの時代以降の記述に見られる十二支とでは性質が異なることが明らかになった。従って、それぞれを以下で個別に論じることとする。

第二節　ティムール期の記述に見られる十二支

具体的な違いとしては、まず記載数の多少を挙げることが出来る。十二支の記載は創始者ティムールの時代の記述に集中している。そのため、複数の研究者がこの時代の十二支について言及しているものの、年始に関する見解は一致を見ていない。

タウエルは『歴史精髄』の校訂本の末尾に付した十二支（le cycle uigūr）と西暦の対照表の中で、"L'année commence par l'équinoxe vernal"とその春分年始を明記している［Ḥāfiẓ-Tauer: 320 (n. 1)］。一方でオバンはティムール勃興期の事象の年代比定を行なう際に、十二支（le cycle des Douze Animaux）を立春年始のものとして扱っている。[4] マンツは十二支（the animal cycle）について"a solar calendar starting in the spring"という表現を使う。[5] そしてメルヴィルはこの時期の史料、特に『勝利の書（ヤズディー）』に見られる十二支（the Chinese-Uighur year）を春分年始のものとした。

メルヴィルの議論の問題点については前述の通りであり、彼を除く諸氏は、自身が判断する十二支の年始について根拠を明確にしていない。

そこで史料を直接あたると、ティムール期の記述において、十二支でもって他書に拠らぬオリジナルな年代表記をする史料は、『勝利の書（シャーミー）』・『ムイーン史選』・『勝利の書（ヤズディー）』・『歴史精髄』の四つであることが分かった。それら四つの史料に見られる十二支を抽出した結果、全部で八十二例を確認することが出来た。[6]

年始の検討方法としては、「七八一年にあたるヒツジ年の春初め」と先の史料引用にあったように、十二支の多くはイスラームの「とき」であるヒジュラ暦と併記されるため、十二支とヒジュラ暦を西暦換算し、それぞれ比較することで、

当時の十二支の年始の位置を判断することとした。[7]

最初に窺われるのが、十二支による年代表記の不正確性である。両暦の換算が不一致を見せる箇所が度々現れる。[8]その中で、他と比べ十二支の記載数が多く、その総数は六十例に上る。[9]『勝利の書（ヤズディー）』は、年始変容を考える上で極めて重要な史料である。なぜなら同史料には、十二支を立春年始だと仮定した場合に、明らかに写字生の筆記ミスである二箇所を除き、[10]両暦の換算が全く合わない箇所が存在しなかったからである。そして、ヤズディーが十二支を春分年始のものだとは考えていなかったことの証拠が、ティムールの第四次ホラズム遠征の記述に存在する。そこには以下のようにある。

ユースフ・スーフィーが大胆なる足を配慮の道から外し、高慢なる頭によって略奪の手を方々に慎み無く開くと、サーヒブ・キラーン陛下は、憤怒によって血管が波打ち、報復を意図した。そして**ヒツジ年の前期にあたるヒジュラ暦七八〇年シャウワール月**（**Šawwāl-i sāl-i haftṣad wa haštād Hijrī muṭābiq awwal-i qūy yīl**; 一三七九年一月二十一日～二月十八日）

太陽が双魚宮（Ḥūt）へと推移し　一方は宝石箱となり、他方はルビーとなった時

ホラズムへの攻撃を決意し、勝利を飾る軍隊を整えた。

[Yazdī-'Abbāsī I 215-216]

ここでは「ヒツジ年の前期」において太陽が双魚宮に来ている。黄道十二宮では、太陽が白羊宮に入る瞬間が春分である。双魚宮は白羊宮の一つ前にあたるので、ヒツジ年は春分よりも前に始まっていることになる。これらのことから、『勝利の書』の著者ヤズディーは十二支を立春年始のものと理解した上で、十二支とヒジュラ暦との換算を正確に行っていることが分かる。[11]

『勝利の書（ヤズディー）』はティムール朝史研究において、早くからその重要性が認められ、歴史研究に用いられてきたものであるが、[12]年代学的観点から同書に注目した研究は管見の限り存在しない。しかし、この観点から見ると同書の特

徴は際立ったものとなる。ヤズディーは当代随一の文化人であり、天文学にも通暁していた。彼は、『スルターン・キュレゲン天文表』作成のためにサマルカンドの天文台で行なわれた天体観測に関わってもいる。[13] さらに、『勝利の書（ヤズディー）』は同時代史料ではなく、シャールフ期にファールスの統治者であったイブラーヒーム・スルターンの庇護の下で書かれたものであり、[14] ヤズディーはティムール期の諸事の叙述にあたって先行する同時代史料の年代の誤りを正すことを志向している [cf. Ando 1995: 222][15]。

著者が天文学に詳しく、その著作が実際に、先立つ史料の年代的誤りを正していることから、『勝利の書（ヤズディー）』における年代の記載は信頼に足るものであると思われる。そして先述のように、同史料における十二支は明らかに立春を年始としているのである。他の史料に関しても、それらは換算が完全に誤っている箇所があるために判断が困難であるが、いずれの史料にも春分年始の方が都合の良い箇所は存在しない。さらに、イルハーン朝期に立春に祝われていた「新年祭 künyangīlāmīšī」が、一箇所のみであり、かつヒジュラ暦と十二支とが一致しないものの、この時期の記述の中にも存在する [Ḥāfiẓ-Tauer: 119][16]。

これらのことから、帝国暦が廃れた後も、少なくともティムール朝ティムール期までは十二支は未だ変容せず、年始を立春に置いていたという推論が許されると思われる。イスラーム受容の後にテュルク・モンゴルがどのような形で十二支を用いていたのかについては、十一世紀にマフムード・カーシュガリーによって書かれたテュルク・アラビア語辞書である『テュルク諸語集成』が示唆を与えてくれる。カーシュガリーはトラ年を表す bars の項でテュルクの用いる十二支について言及している。

> bars とはヒョウのことである。bars はテュルク語の十二の年の一つである。これは、テュルクが動物からそれぞれ十二の名前を取り、それで十二の年を表すことによって、生誕や戦争その他の時をそれらの年々の巡りで勘定するものである。（中略）
> **そしてテュルクは週をイスラームのもので知るので、七日の名前はテュルクにはない。同様に、都市において、月々の名前はア**

ラビア語で付けられている（wa-laysa li-l-Turk asāmī al-ayyāmi al-sab'ati li-anna al-usbū'a 'urifat bi-al-Islām wa-ka-dālika asāmī al-šuhūri fī al-bilādi yusammá bi-al-'Arabīya）。遊牧民と無知なる異教徒は、アラビア語の月の三ヶ月毎、四季に応じて名前を付けており、それによって時の経過が理解される（以下略）。

[Kāšġarī-facsimi: 87r-88r]

以上の記述から、イスラームの受容の後に、十二支でもって年を数えつつも、ヒジュラ暦で月を数えるテュルクの姿を想定することが出来よう。モンゴル帝国暦もヒジュラ暦も、月の満ち欠けに基づいて月々を数えることは同じであり、彼らがヒジュラ月を受け入れるのは容易であったと思われる。

なぜイスラーム受容後もテュルク・モンゴルが立春年始の十二支を使い続けたのかに関しては、推測の域を出ないものの以下のように考えている。イスラームの礼拝や五行のうちの斎戒と巡礼はヒジュラ月に則って行われる。従って、イスラームの受容に際してヒジュラ月はいち早く取り入れられた。しかし、一方でヒジュラ年に関してはそれが宗教儀礼と直接関わることはなく、月ほどには重視されなかった。加えて十二支は特にテュルクが六世紀から使い続けていたものであり、彼らの間に深く根付いていた[17]。これらの理由から、十二支は、イスラーム受容後もテュルク・モンゴルの間で用いられ続けたのだと思われる。

第三節　シャールフ期以降の記述に見られる十二支

次にティムールの実質的な後継者であるシャールフ期以降の時代の記述に見られる十二支についてであるが、先述のように記載数が激減する。具体的にはティムール期の三十五年間で八十二例を数えた記載例が、シャールフ期以降の九十八年間ではわずかに十九例である。このような状況もあり、この時期の十二支について研究者の言及は管見の限りない。しかし、ティムール期の十二支が立春年始である可能性が高いことが分かり、その後サファヴィー朝では十二支の年始が春

分にあることが明らかになっている以上、年始変容を考える際にこの時期の十二支の記載は非常に重要なものとなる。そして実際にこの時期の十二支の記述は特徴的であり、変容に関して多くの情報を与えるものなのである。

まず先程と同じようにこの時期の十二支を、併記されるヒジュラ暦と比較したが、絶対数が少ないうえに換算の誤りも存在したため、年始を確定することは出来なかった。[18] しかし、この時期の十二支には記載数の少なさ以外にもいくつか特徴が見られた。それが次にあげる二点である。

・『ハサン集史』[19]における記載数の多さとその内容

・財務年としての使用

ティムール朝中期に書かれた『ハサン集史』は、年を経るにつれ、その評価を高めてきた史料である。この史料のイスタンブル写本を見たタウエルはこれを重要でないと断じたが、オバンはイスタンブル写本の記述よりもより詳しいテヘラン写本を利用し、当時のイラン情勢を描いた。[20] 最近ではマンツがシャールフ期の研究［Manz 2007］の中でこの史料を大いに活用している。その年代学的特徴を詳察した研究は、先の『勝利の書（ヤズディー）』と同じく存在しないが、しかしこの史料はこの時期の史料の中で、例外的に十二支を多く記載する史料であり、この観点からも重要なものである。具体的には、全十九例のうち実に十五例が同史料の記載となっている。さらにこの史料において最も注目すべき点は、同史料が十二支の春分年始を明記する点である。

つまり、**ハーン暦一四五年にあたるウサギ年の始まるノウルーズの日中（rūz-i nawrūz-i ibtidā'-i sāl-i tūšqān yīl muwāfiq sana-yi xams wa 'arba'īn wa mi'a-yi Xānīya;** 一四四七年三月十二日）、序章で述べられたように、ハーカーン陛下（シャールフ）はレイにて神の慈悲の下へと至り、スルターン位を、全てを備えし王子（スルターン・ムハンマド）に授与なさった―彼ニ慈悲アレ―。

［Ḥasan-Aṣṣār: 46］

このようにはっきりと十二支がノウルーズ、つまり春分から始まることが明記されているのである。加えて、これは後

の議論で重要になってくる事実であるが、『ハサン集史』の著者イブン・シハーブはイランで行政官を務めていた。[21]

次に財務年としての使用に関してであるが、（2、18、19）のように、この時期の十二支は一部「地租（māl）[22]」との組み合わせで用いられる。これは叙述史料の中ではこれ以前の時代には全く見られなかった用法である。例えば、シャールフが八一七／一四一四年にイスカンダルの反乱を鎮圧し、イスファハーンに入った後の件がそれである。

安心し、平静の中で、日々弥増す王朝の御旗の偉大さが増えることを祈りつつ精進するようにと、［シャールフは］至高なるディーワーン[23]――至高ナル神ガ、ソレヲ高カラシメンコトヲ――の管轄下にあったウマ年の地租（**māl-i yūnt yīl**）の三分の一を臣民に対して免除した。

［Ḥāfiẓ-Jawādī III 552］

シャールフ期以降の十二支は、『ハサン集史』の中で春分年始であると明記され、さらに他の史料においては財務年として用いられている箇所がある。これらのことを考え合わせると、シャールフ期以降の記述に見られる十二支は、春分年始のものへと変容を遂げており、それには財務が関わっているのではないかと推測される。十二支の年始の変容の所以が、財務暦との結びつきにあることは、既に語られるところである。先述のようにメルヴィルの論[3]では、十二支が財務暦であるハーン暦との関連で年始を変えていったことが述べられていた。しかし研究者たちは、「とき」の結びつきというものがいかなる現象であり、いかなる契機で起こったのかについては説明をしていない。従って、以下で十二支と財務暦との関連について考察し、年始変容の所以を解明したい。

① 例えば田村の論考によれば中世フランスでは「夏」と「冬」の二つが強調される二季性であった［田村俶「中世フランスの季節構造」『思想』七六八（一九八八年）、十五頁］。

② 小澤重男『元朝秘史』岩波文庫（一九九七年）、上―一三〇頁（注一）。

③ Spuler, B., *Wüstenfeld-Mahler'sche Vergleichungs-Tabellen*, Wiesbaden, 1961, p. 39.

④ Aubin J., "Le Khanat de Čaġatai et le Khorasan (1334-1380)", *Turcica*, 8/2, 1976, p. 49 (n. 149).

⑤ Manz, B.F., *The Rise and Rule of Tamerlane*, Cambridge, 1989, p. 228.

⑥ この節において（　）の中にアラビア数字を入れて記される記号は末尾の「ティムール期十二支対照表」の対応番号を表している。

⑦ ここで生じるのが、立春年始の十二支を何に基づいて西暦換算する

のかという問題である。対照表における、西暦換算された立春年始の十二支の日付は、『イルハーン天文表』のヒタイ暦の数値に基づいて算出されている。換算に際しては、ファン・ダーレンのCALH program（version 1. 2, 1996）を利用した。しかし、先述のように、天文表に記されるヒタイ暦は、中国の官暦とは若干異なる。そしてファン・ダーレンらの論考によれば、『イルハーン天文表』のヒタイ暦の章の最後に記されるヒジュラ暦とヒタイ暦との換算表における閏月の位置は、その天文表に記されるヒタイ暦ではなく、むしろ中国の官暦の方に合致するものとなっている［van Dalen, B. Kennedy, E.S., Saiyid, M.K., "The Chinese-Uighur Calendar in Tusi's Zij-i Ilkhani", *Zeitschrift fur Geschichte der Arabisch-Islamischen Wissenschaften*, 11, 1997, p. 138］。従って、少なくともイルハーン朝期の立春年始の十二支が、中国の官暦を意識したものであったことは間違いない。そのため、考察にあたっては、［陳垣『中西回史日暦』増補版、台北（一九七二年）］を参照して官暦の西暦換算も行なった。その結果、閏月の位置の違いから、官暦の年始の方がヒタイ暦のものよりも一ヶ月ほど早くなった年が三つあったが（35、41・42、44・45）、他の年始の誤差は一日前後であった。月がずれる三つの年に関しても、年始がどちらにあろうと変容の議論には影響が無いことを確認している。

⑧ 対照表において立春合致（A）と春分合致（B）が共に×である箇所のことである。具体的には（1、3、5、7、16、18、23、54、55、79）の十箇所である。史料間で年代表記に齟齬が見られる王朝創設から十年の間に誤りが集中していることを特徴として挙げることが出来る。この時期の諸事の年代比定に関しては別稿を期している。

⑨ ヤズディーは『勝利の書』の序章において自身の用いる暦（ヒジュラ暦と十二支）とその所以について以下のように述べている。

最も有名な暦はヒジュラ暦とテュルク暦（Tawārīx-i Hijrī wa Turkī）であるので、この書にはこれら二つの暦が用いられている。ヒジュラ暦は月の巡りに基づき、その一年は三五四日と少しである。そしてテュルク暦は太陽の巡りに基づき、その一年は三六五日と少しである。そしてテュルク暦はよく知られているように、年々の名前でもって記録されている。［Yazdī-Urunbaev: 96］

⑩ まず、（1）の不一致に関しては、前後の記述とまったく年代が合わないことから、これがヒジュラ暦の筆記ミスによることは明らかである。さらに（79）の不一致に関しても、イヌ年ではなく、ウマ年であれば換算が一致するのであるが、イヌ年（ئيت）とウマ年（ئات）はスペルが似ており、たびたび間違いが起こることが指摘されており［Khare G. H., "The Turkish Duodenary Cycle and Its Use by Moghuls in India", *Islamic culture*, 26/1, 1952, p. 66］、さらに別の写本ではこの箇所はウマ年と表記されている［Yazdī-Urunbaev: 4026］。従って、この箇所も写字生の筆記ミスである可能性が高く、誤りが筆者に起因することはないと思われる。

⑪ 立春年始に合致しながらも春分年始にそぐわない箇所（A○、B×）が、先程のメルヴィルの引用箇所（14）と、第四次ホラズム遠征の箇所（26）以外にも、一例（56）見出された。

⑫ Ando, S., "Die timuridische Historiographie II : Šaraf al-Dīn 'Alī Yazdī", *Studia Iranica*, 24/2, 1995, pp. 219-220.

⑬ ヤズディーは、彼を庇護していた王族のスルターン・ムハンマドがシャールフに反乱した際に、捕らわれの身となる。しかし、彼はウルグ・ベクの息子アブド・アッラティーフの求めにより助命されるのである。それは彼の天文学の知識ゆえであった［cf. Aḥmad-Aḥsar: 241-242］。

⑭ シャラフ・アッディーン・アリー・ヤズディーと彼の『勝利の書』については［Woods 1987: 99-104］を参照されたい。

⑮ 例えば［Yazdī-Abbāsī: II 164］では、［Šānī-Tauer: 215］で使われているものと類似の表現を用いながら、その十二支表記のみを修正している。

⑯ この箇所の存在は、すでにメルヴィルによって指摘されている［Melville 1994: 93］。ただし新年祭の記述は当初本文にはなく、おそらくハーフィズィ・アブルー本人が後から書き加えた部分である［cf. Hāfiẓ-Tauer: XVIII］。

⑰ 彼らへの十二支の浸透を考える上で、それが占いの一要素であったことは必ず考慮されるべきだと思われる。十二支は占いと密接に結びついていた。マフムード・カーシュガリーも、テュルクが十二支によって予兆を見ることを伝えている上［Kāšġarī-facsim: 87v-88r］、天文表の中国暦のところでも暦注である十二直が記されている［Tūsī-ms: 11r-11v; Ulug Beg-Sédillot: 332-333］。彼らが未来を見据える上で十二支は必要であったのである。

⑱ この節において、（ ）の中にアラビア数字を入れて記される記号は末尾の「シャールフ期以降十二支対照表」の対応番号を表している。

⑲ この書を著したイブン・シハーブは八五五年ズー・アルヒッジャ月の半ば／一四五二年一月頃にファールスと北イラク（Irāq-i ʿAjam）を統治していたスルターン・ムハンマドの許で同書の執筆を始めたが、彼が兄弟のアブー・アルカースィム・バーブルに敗れ殺されると、八五七年ズー・アルカアダ月八日／一四五三年十一月十一日までにバーブルに同書を献呈した［Ḥasan-Aflātūr: (intro.) 11］。

⑳ Aubin, J., *Deux sayyids de ham au XVe siècle, contribution à l'histoire de l'Iran timouride*, Wiesbaden, 1956, esp. pp. 17-19.

㉑ 彼はティムールの孫イスカンダルのワズィールであったハーフィズ・ラーズィーの万人隊（tūmān）の軍召集官（tavāǧī）として働いた後、キルマーンでワクフの管理官（ʿāmil）を三十年間務めた。ワクフ管理官となる前に財務官であった可能性もある［Aubin 1956: 17-18］。

㉒ マールとは「財産」を意味するアラビア語の普通名詞であるが、この時期のマールは地租（поземельный налог）を指した［*История Узбекской ССР*, 1, Ташкент, 1967, p. 483］。

㉓ ディーワーンとはティムール朝において行政機関を指すが、単に財務管理組織を表す場合もあり、さらに国政上の重大事を決定する御前会議をも意味した。そして特に「至高なるディーワーン」と表現される場合は君主・中央政府のディーワーンのことを指す［久保一之「ティムール朝とその後――ティムール朝の政府・宮廷と中央アジアの輝き――」『岩波講座 世界歴史11 中央ユーラシアの統合9-16世紀』岩波書店（一九九七年）、一五一頁］。

第三章　十二支と財務暦

十二支と財務暦との関連を考える前に、イスラーム国家に特有の暦事情について述べておく必要があろう。イスラームの暦はムハンマドがヒジュラを行なった西暦六二二年を暦元とする太陰暦のヒジュラ暦である。これに基づいてラマダーンの斎戒を始めとする宗教儀礼が執り行われる。しかし、このヒジュラ暦には大きな難点があった。それは、この暦が月

の運行のみに基づく太陰暦であることに起因していた。太陰暦であるヒジュラ暦の一年は三五四日強であり、太陽年の三六五日強よりも十一日ほど短くなっている。従ってヒジュラ暦は季節周期と合致せず、例えばムハッラム月は冬から秋、秋から夏というように季節を移って行ってしまう。これは季節に基づいて行なわれる農事にとって非常に不都合であり、同時に農産物を財源とする国家の運営に不都合なものであった。そのためイスラーム国家は宗教暦であるヒジュラ暦とともに財務暦を併用していた。

財務暦は多くの場合、その地に古くからある太陽暦もしくは太陰太陽暦をそのまま用いたものであった。ペルシア語文化圏では、十一世紀にセルジューク朝君主マリクシャーによってジャラーリー暦が施行されて以降、この暦が財務暦として使われてきた。先述のように、この暦においてノウルーズは春分に固定されていた。そしてこのノウルーズが徴税開始日（iftitāḥ al-xarāj）にあたっていたのである。①

第一節　ティムール朝における財務暦

ティムール朝期においてはいかなる財務暦が使用されていたのか、それについては先程十二支を正確に記す史料として紹介したヤズディーによる『勝利の書』の序章『世界征服者の歴史（Tārīx-i Jahāngīr）』の中に記述がある。ヤズディーはイランの歴代王朝で用いられていた財務暦の変遷について以下のように述べる。

一方ハラージュ暦はホスロウの父クバードの時代から施行されている。そしてジャラーリー暦はスルターン・ジャラール・アッディーン・マリクシャーの時代からである。行政官（ahl-i dīwān）はフラグ・ハーンの［イランへの］侵攻から今日［まで］ジャラーリー暦を用いており、それをハーン暦と呼んでいる。ある者は、ハーン暦はスルターン・ガザンの時代から起算されていると語る。

［Yazdī-Urunbaev: 9a］

ヤズディーが言う今日とは八二二／一四一九―二〇年のことであり［Yazdī-Urunbaev: 9b］②、シャールフ期（一四〇九―一

四四七年）には財務暦としてハーン暦が使われていたことが分かる。[3]

さらに十二支の春分年始を明記する『ハサン集史』において記載十五例のうち八例までが十二支とハーン暦を併記している。後の議論で重要になると述べたように、著者イブン・シハーブは西イランで行政官を務めており、その立場が史料に反映していることは想像に難くないところである。行政官であった彼は、十二支とハーン暦との密接な繋がりを意識していたように思われる。

従って、十二支は徴税暦の中でも特に、ハーン暦との結びつきによって年始を春分へと変えていったと考えられる。ここで問題となるのが、なぜ十二支がハーン暦と結びついたのかということである。次節でこの問題に対する解答を提示し、年始変容についての推論を確たるものとする。

第二節　ハーン暦が十二支に影響を及ぼした所以

ハーン暦が十二支に影響を及ぼした所以を端的に述べると、それは文書上と実際上の徴税に用いられる「とき」の表し方の違いということになる。以下でそのことについて詳しく述べる。

十二支と徴税の「とき」との結びつきを見るためには、まず両者の接点について検討する必要がある。ティムール朝史料の中で、叙述史料以外に、財務に関わる十二支を記す史料が存在する。それが文書史料、具体的には領主の名で発せられた勅令である。例えば、一三九六年や一四〇一年に発行されたペルシア語文書、[4] 一四一二年に発行されたウイグル文字テュルク語文書[5]は、いずれも徴税の年を表すのに十二支を用いている。もちろんこのような微少な事例のみに基づいて議論を進めることは出来ない。

しかし、ティムール朝期の文書に十二支が記されていたことはその王朝の前後に存在した政権の文書行政やティムール朝下の書記集団を考慮したときに説得力を持つものとなる。まず、このように十二支を文書に用いる習慣はティムール朝

に始まるものではなく、それはモンゴル帝国からの伝統であった。モンゴル帝国の勅令（yarlig）は様々な言語で書かれたが、モンゴル語やペルシア語で書かれたものについては十二支が記載されていたことが知られている。[6] さらに小野によれば、ラテン語書簡にも十二支が音写されている。[7] このように彼らの文書行政においては、年を表すのに十二支が用いられていた。

そしてモンゴル帝国で文書行政を担ったウイグル人書記がティムール朝期に残存していたことを史料から見て取る事が出来る。彼らは史料においてバフシー（baxši）と記される。[8] ティムール朝時代のバフシーによって記された文献が数点残っており、先のウイグル文字テュルク語文書もその一例であるが、そこには十二支が記されている。[9]

さらにティムール朝滅亡後、その王族がインドに逃れて建てた王朝であるムガル朝の財務に関わる行政文書には十二支が使われることがハーレの研究［Khare 1952］から分かっている。インドの王朝の行政文書に十二支が使われていた事例はそれ以前には無く、それがティムール朝の影響を受けたものであることは間違いない。ただし、ムガル朝で使用される十二支の年始が立春・春分のいずれかにあるのかについて、ハーレは判断を保留している。[10]

このように王朝自体の状況に加え、前後に存在した政権の状況やティムール朝におけるウイグル人初期の存在を考慮すれば、ティムール朝期の勅令において十二支が徴税の「とき」として用いられていたことは間違いのないところである。

しかし、実際に徴税に用いられていた「とき」は、地域によっては勅令とは異なるものであった。ティムール朝シャールフ期の徴税の「とき」が十二支ではなく、ハーン暦であったことは既に述べた通りである。ただ、「地域によっては」と留保したのは、ティムール朝は王朝創設当初からハーン暦を財務暦として用いていたわけではなく、王朝の全領域でハーン暦が用いられていたかは定かではないからである。ティムール朝は中央アジアから勃興した王朝であり、ハーン暦はイランのイルハーン朝で使用されていたものであった。[11] このことから、ティムール朝がハーン暦を使用し始めたのは、ティムールが旧イルハーン朝領域[12]をその版図に収めてからだと考えられる。ティムール朝の行政機構が未解明であること

は序章で既に述べた通りであるが、マンツが言うように、行政機構は二つのディーワーンからなり、一つはほぼイラン官僚を人員とし、徴税や書信を扱うものであり、もう一つはおそらくテュルクを人員とし、軍事を扱うものであるということに関しては一般的な同意がある［Manz 2007: 79-80］。従って、イルハーン朝から王朝は変われども実際に徴税に携わった人員は変わらずイランの民であり、彼らは従来どおりハーン暦を徴税の基準として用い続けたと考えられる。

ハーン暦が旧イルハーン朝領域において徴税の「とき」として用いられていたことが分かったところで、一三九六年にナフチヴァーンの封土に関して出された勅令を見ると極めて興味深い事実が判明する。ナフチヴァーンはアラス川の北側に存在し、通常アゼルバイジャンの領域と見なされる、モンゴルの下で重要性を高めた都市である。[13] つまり旧イルハーン朝領域の都市ということになる。さらにアゼルバイジャンは一三九三年よりティムールの三男アミーラーンシャーの所領となっており［川口 2007: 94］、ティムール朝の直接支配の下に置かれていた。従ってこの勅令は、徴税にハーン暦が用いられていた地域に対して発せられたものと考える事が出来る。それには以下のように記されている。

スルターン・マフムード・ハーン　ザイン・アビディーンへ
アミーラーンシャー・キュレゲン我らが言葉
スルターン・サンジャルとナフチヴァーン・テュメンの官吏・役人・管理官たちは以下のことを知るように。（中略）
我らはジューラーハ村の税収を彼にソユルガルとして授与する。従って、彼はネズミ年の初めから（**az ibtidā'-i siçqān yīl**）その地の産物と税収を税率に応じて受け取り、自身の生活や出費のために使うこととなる。（以下略）

［Fekete 1977: 64］

このように、ハーン暦が実際の徴税に用いられていた地域においても、勅令における徴税の「とき」は十二支だったのである。この勅令を受けとった行政官たちにとって、十二支の年始は実質的に、実際の徴税期と同じ春分であった。このような理解が、イランの行政官であったイブン・シハーブの著した『ハサン集史』での十二支の春分年始の明記に繋がっ

ていることは間違いないであろう。

これまでの議論で明らかになった十二支の変遷をまとめると以下のようになる。十三世紀のモンゴル侵入とともにペルシア語史料に記され始めた十二支は、当初モンゴルの帝国暦として彼らが用いていた中国暦の年表記であり、その年始を立春においていた。ただ、帝国暦が廃れた後も、立春年始の十二支はこの世界で使い続けられていた。ティムール朝期になると、イランでは、実際の徴税においては春分を年始とするハーン暦が使われる一方で、勅令の中では徴税の「とき」に立春年始の十二支が使われるという並立状況が生まれた。この状況が続く中で十二支は、特にイランの行政官たちによって、実際の徴税期と同じ春分を年始とするものとして理解されるようになり、その理解が行政官によって記された『ハサン集史』に反映した。

① Taqizadeh, S.H., "Various Eras and Calendars Used in the Countries of Islam", *Bulletin of the School of the Oriental Studies*, 9, 1939, p. 906.

② ただし『世界征服者の歴史』に関しては、八三一／一四二七―二八年の記述も含まれるなど、ヤズディーによって随時補綴がなされていることが指摘されている［Ando 1995: 222］。

③ この記述ではハーン暦はジャラーリー暦を名称変更したものとして扱われている。確かにハーン暦はジャラーリー暦と同じくノウルーズを年始としており、徴税日の観点から言えば両暦の違いはほとんどない。ただ、ハーン暦は日没後に太陽が春分点を通過した場合、翌日をノウルーズとする。月名に関してジャラーリー暦はイラン暦特有のものを使うのに対し、ハーン暦はテュルク語の月名を使う［Sayli, A., *The Observatory in Islam*, New York, 1981, p. 229］。

④ Fekete, L., *Einführung in die persische Paläographie*, Budapest, 1977, pp. 63-65, 71-75.

⑤ Deny J., "Un soyurgal du timouride Šāhruh en écriture ouigoure", *Journal Asiatique*, 245, 1957, p. 255.

⑥ これについては、［Turan, O., *Onüki hayvanlı türk takvimi*, Istanbul, 1941, pp. 57-58; 杉山正明「モンゴル命令文研究導論――真定路元氏県開化寺聖旨碑の呈示をかねて」『モンゴル帝国と大元ウルス』京都大学出版会（二〇〇四年）、三七二―四〇二頁］を参照されたい。なおトゥランの研究書に関して、デルファーは、それを十二支研究のものとしては最も詳しいものと評している［Doerfer 1963-1975: IV248］。入手困難な同書を取得できたのは、今澤浩二氏と今松泰氏のご厚意のおかげである。ここに記して謝意を表す。

⑦ 小野浩「とこしえなる天の力のもとに」『岩波講座世界歴史 二：中央ユーラシアの統合 9―16世紀』岩波書店（一九九七年）、二〇〇頁。

⑧ バフシーという言葉は中国語の「博士」に由来するとも言われ、イルハーン朝期からティムール朝を経てムガル朝期の史料にも現われるが、その語の意味するところは時代によって変わっていく。デルフ

ァーは、「バフシー」が意味するものが、時代を経るにつれて、「仏僧」→「政務を行う書記官として任じられる仏僧」→「軍政において任じられる書記官」と、意味を変えていくことを伝える［Doerfer 1963-1975: II 271-273］。

⑨ ティムール朝期バフシーの活動に関しては［Ando, S. *Timuridische Emire nach dem Maʿāṯir al-ʿanāb: Untersuchung zur Stammesaristokratie Zentralasiens im 14. und 15. Jahrhundert*, Berlin, 1992, p.234(n. 10)］にまとめられている。バフシーによって残された文献とそれが十二支を記すことについては、［Turan 1941: 59］を参照されたい。

⑩ ハーレは判断を保留しているものの［Khare 1952: 70-71］、ムガル朝における十二支の年始は立春年始であった可能性が高い。ムガル朝史料『アクバル会典』は、暦法について述べる章の中で立春年始のヒタイ暦（Tārīx-i Xiṭāy）について述べた後に、十二支を年表記とするテュルク暦（Tārīx-i Turkī）について語り、その暦体系は年と日を十二周期で数えることを除いて中国暦と同じだと語っているからである［Abū al-Faẓl-Blochmann: 272-273］。さらに後述するように十二支の年始変容は春分に徴税日を置くイランの伝統と密接に関わっているものの、インドの徴税日は春分を基準とするものではなかったのである。

⑪ 実際にハーン暦がイルハーン朝の行政で用いられていたことは、同王朝アブー・サイード期（一三一六―一三三五年）の文書に実例が見られる上［Herrmann, G., *Persische Urkunden der Mongolenzeit: Text- und Bildteil*, Wiesbaden, 2004, pp. 102, 107］、同王朝治下のファールスで行政官を務めていたヴァッサーフが自らの史書の中でハーン暦を頻繁に用いていることから明らかである［Melville 1994: 97(n. 69)］。加えてイルハーン朝滅亡の後も、その領域でハーン暦が使われ続けていたことが、一三四九年と一三六九年に出された文書から分かる［Herrman 2004: 134, 166］。

⑫ 旧イルハーン朝領内とは、具体的にはアム河以西の現在のイラン高原からアナトリア東部までとイラクを指す［岩武昭男「イル・ハーン朝」『岩波イスラーム辞典』岩波書店（二〇〇二年）、一七八頁］。

⑬ Le Strange, G., *The Lands of Eastern Caliphate*, Cambridge, 1905, p. 167.

おわりに

こうして徴税の「とき」となった春分＝ノウルーズを年始とする十二支は、ノウルーズの祝祭の浸透と共に、テュルク・モンゴル、イランを問わず、ペルシア語文化圏の人々に浸透していったと思われる。テュルク・モンゴルがイランの地に侵攻してから三百年以上のち、遅くとも十六世紀には元来イランの慣習であったノウルーズの祝祭が、テュルク・モンゴルの間でも行われていたことが知られている。[1] ノウルーズの普及に伴ってそれを年始とした十二支も、民間の「とき」としてペルシア語文化圏において広く受け入れられ、特にイランでは今日まで用いられ続けることとなる。

ペルシア語文化圏における十二支の年始は、まずイランにおけるティムール朝の行政官たちによって春分年始のものとして理解された。そして叙述史料の中でそのことが最も早く現れるのが、イランの行政官によって著されたティムール朝中期の史料『ハサン集史』であった。従って、変容の時期を示すとすれば、ティムール朝が旧イルハーン朝の直接支配を始める一三八〇年代から『ハサン集史』が著された一四五三年までの間ということになろう。

十二支の年始の変容を追うことは同時に、十二支という「とき」が変質していく過程を追うことでもあった。十二支は、最初にテュルク・モンゴルによって帝国暦、つまり為政者の「とき」としてペルシア語文化圏にもたらされた。為政者の「とき」でなくなった後も、文書上では徴税の「とき」として用いられ続け、実際の徴税の「とき」と融合して年始を変える。そしてその後はテュルク・モンゴルかイランかを問わず、広くペルシア語文化圏の民の「とき」となっていったのである。

最後に、十二支の年始変容の検討を通じて明らかになった、ティムール朝期のテュルク・モンゴルとイランとの文化接触の側面と今後の課題について述べることで、結びに代えたい。

十二支の年始変容は、支配者であるテュルク・モンゴルの用いる「とき」に対する、イラン行政官の理解の反映であった。この事実は、テュルク・モンゴルとイランとが係わり合ったティムール朝の行政構造が、両者の文化接触に果たした役割を如実に物語る。今後は、本論で明らかになったテュルク・モンゴルとイランとの混淆のありようが、冒頭で並べたティムール朝研究史の諸問題の解決にいかに寄与するのかということについて、検討していかなくてはならない。残された課題の大きさを実感しつつも、「とき」がこの時代の歴史研究に果たすことの出来る役割の大きさもまた強く感じる次第である。[2]

① 後藤裕加子「宮廷儀礼としてのノウルーズ―十六世紀後半サファヴィー朝宮廷とムガル朝宮廷の比較から」『人文論究』五五／二（二〇〇五年）、九七―九八頁。

② 本論のもとになった神戸大学での修士論文作成の際には、清水和裕氏並びに自身の指導教官であった真下裕之氏に数え切れぬほど貴重なご指摘を賜った。最後に記し、謝意を表す。

シャールフ期以降十二支対照表

	事件	ヒジュラ暦	西暦換算	十二支	西暦換算	A	B	典拠
1	ビーキー誕生	815年ジュマーダー1月10日金曜日	1412年8月18日	辰	1412年2月13日～	○	○	Hafiz 470
2	シャールフのイスファハーン占領	(817年)	1414年3月23日～	午(始日)	1414年1月22日～	△	○	Hafiz 552
3	スルターン・ムハンマド、イスファハーンに到着	850年	1446年3月29日～	卯(ハーン暦145年)	1447年1月17日～	△	△	Hasan 45
4	シャールフの死			卯始め(ハウルーズ、ハーン暦145年)	1447年1月17日～			Hasan 46
5	スルターン・ムハンマド、ハマダーン及びレイ方面に出立			辰春(ハーン暦146年)	1448年2月5日～			Hasan 47
6	アブド・アッラティーフの死	854年	1450年2月14日～	辰(ハーン暦147年)	1449年2月5日～	×	×	Hasan 55
7	スルターン・ムハンマド、イスファハーンに軍を派遣		1447年3月19日～	巳初(ハーン暦147年)	1449年1月25日～			Hasan 49
8	スルターン・ムハンマド、ファールスに落位	855年	1451年2月3日～	未(ハーン暦150年)	1451年2月2日～	○	△	Hasan 57-8
9	ルクン・アッディーン・ハサン・ヤズディーらがケルマーンに到着			未	1451年2月2日～			Hasan 73
10	サイイド・シャルワーニーのケルマーン支配開始	855年サファル月20日	1451年3月24日	未	1451年2月2日～	○	○	Hasan 124
11	スルターン・ムハンマドの死	855年ズー・アルヒッジャ月中旬	1451年12月25日～	未	1451年2月2日～	△	○	Hasan 139
12	ハリール・スルターンのケルマーン包囲			申(ハーン暦151年)	1452年1月22日～			Hasan 171
13	サイイド・シャルワーニーのケルマーン支配	856年	1452年1月23日～	申(ハーン暦151年)	1452年1月22日～	○	△	Hasan 95
14	ケルマーンのウクフ管理官による告発	856年	1452年1月23日～	申	1452年1月22日～	○	△	Hasan 100
15	ヤール・アフマドのケルマーン進撃	857年シャアバーン月12日月曜日	1453年8月18日	酉	1453年2月9日～	○	○	Hasan 154
16	サンジャルのケルマーン侵攻			酉	1453年2月9日～			Hasan 172
17	サンジャル、ケルマーンを総攻撃	857年ズー・アルカアダ月8日土曜日夜	1453年11月10日	酉	1453年2月9日～	○	○	Hasan 175
18	スルターン・イブラーヒームのヘラート占領	(861年)	1455年11月23日～	丑(始日)	1457年1月26日～	△	△	Samarqandī II 601
19	カラコユンルのヘラート占領	(862年)	1457年11月9日～	寅(始日)	1458年1月16日～	△	△	Samarqandī II 837

Aは立春年始に日付が合致するかどうか。
Bは春分年始に合致するかどうか。
○　完全に合致。
△　合致しない可能性あり。
×　完全に合致しない。
　典拠の記号と史料の略号との対応は以下の通り。
Shami→[Šāmī-Tauer]
Natanzi→[Naṭanzī-Aubin]
Yazdi→[Yazdī-'Abbāsī]
Hafiz→[Ḥāfiẓ-Tauer]
Hafiz→[Ḥāfiẓ-Jawādī]
Ḥasan→[Ḥasan-Ašār]
Samarqandi→[Samarqandī-Nawā'ī]

斜字は、十二支がヒジュラ暦に先んじて書かれている箇所であることを表している。

ティムール期十二支対照表

	事件	ヒジュラ暦	西暦換算	十二支	西暦換算	A	B	典拠
1	ティムール、フサインへの反抗を決意	777年秋	1375年秋	戌	1370年1月28日～	×	×	Yazdi I 91
2	ソユルガトミシュ即位	771年ラマダーン月12日水曜日	1370年4月9日	戌	1370年1月28日～	○	○	Yazdi I 158
3	*ティムールによるクリルタイ召集*	*773年*	*1371年7月16日～*	*亥春(春分)*	*1371年春分*	×	×	*Natanzi 291*
4	モグーリスターン遠征	772年	1370年7月26日～	亥	1371年1月18日～	△	△	Yazdi I 169
5		773年後期	1371年7月15日～	亥	1371年1月18日～	×	×	Hafiz 29
6		773年	1371年7月15日～	亥	1371年1月18日～	△	△	Shami 64
7	*ズィンデ・ハシュムの降伏*	*774年*	*1372年7月3日～*	*子春*	*1372年春*	×	×	*Natanzi 296*
8	第一次ホラズム遠征			*子*	*1372年2月6日～*			*Shami 66*
9		773年春	1372年の春	子	1372年2月6日～	○	○	Yazdi I 175
10	第二次ホラズム遠征	774年ラマダーン月	1373年2月24日～	丑	1373年1月25日～	○	△	Yazdi I 182
11		(7)75年春	1374年春	丑	1373年1月25日～	△	△	Shami 68, Hafiz 35
12	ジャハーンギールの捕縛	(7)76年	1374年6月12日～	寅	1374年1月12日～	△	△	Shami 68
13		775年シャウワール月	1374年3月16日～	寅	1374年1月12日～	○	○	Yazdi I 182
14	モグーリスターン遠征	(776年)シャウワール月1日	1375年3月5日	卯前期	1375年2月2日～	○	×	Yazdi I 189
15		(7)77年シャアバーン月1日	1375年12月26日	卯	1375年2月2日～	○	○	Shami 69
16	第三次ホラズム遠征	*779年*	*1377年5月10日～*	*辰春*	*1376年春*	×	×	*(Natanzi) 414*
17		777年春初	1376年春	辰	1376年1月22日～	○	○	Yazdi I 194
18		778年ノウルーズ	1377年3月12日	辰	1376年1月22日～	×	×	Shami 71
19	ジャハーンギールの死	777年	1375年6月2日～	辰	1376年1月22日～	△	△	Yazdi I 201
20	*ウルス・ハーン討伐*			*辰後期*	*1376年1月22日～*			*Yazdi I 206*
21	*キプチャク草原からの帰還*	*778年*	*1376年5月21日～*	*巳前期*	*1377年2月9日～*	○	○	*Yazdi I 209*
22	トクタミシュをスィグナークに派遣	778年後期	1376年5月21日～	巳	1377年2月9日～	○	○	Yazdi I 209
23		780年	1378年4月30日～	巳	1377年2月9日～	×	×	Hafiz 42-3
24	*シャールフ誕生*			*巳中期*	*1377年2月9日～*			*Yazdi I 210*
25	*サイフ・アッディーンのヒジャーズからの帰還*			*午*	*1378年1月30日～*			*Yazdi I 215*
26	第四次ホラズム遠征出発	780年シャウワール月	1379年1月21日～	未初	1379年1月19日～	○	×	Yazdi I 216
27		*781年*	*1379年4月19日～*	*未春初*	*1379年春*	△	△	*Natanzi 304*
28		781年	1379年4月19日～	未	1379年1月19日～	△	△	Shami 79
29	*ホラズム征服*	*781年*	*1379年4月19日～*	*未*	*1379年1月19日～*	△	△	*Yazdi I 221*
30	アク・サライ建設	781年後期	1379年4月19日～	甲春	1380年春	○	○	Yazdi I 221
31	*ミーラーン・シャーをホラーサーンに派遣*	*782年*	*1380年4月7日～*	*申秋*	*1380年秋*	○	○	*Yazdi I 225*
32	イラン出兵を企図	*782年後期*	*1380年4月7日～*	*酉前期*	*1381年1月26日～*	○	△	*Yazdi I 227*
33		*783年*	*1381年3月28日～*	*酉春*	*1381年春*	○	○	*Natanzi 307*
34	ヘラート征服	783年ムハッラム月	1381年3月28日～	未or酉	(酉)1381年1月26日	○	○	Yazdi I 236
35	キラート城攻略	784年ラビーウ I 月上旬	1382年5月15日～	戌	1382年1月15日～	○	○	Yazdi I 249
36	ディルシャード・アーガーの死	785年	1383年3月7日～	亥	1383年2月3日～	△	△	Yazdi I 260
37	モグーリスターンへの軍派遣	785年	1383年3月7日～	亥	1383年2月3日～	△	△	Yazdi I 261
38	*アム河を渡る*	*(7)85年*	*1383年3月7日～*	*亥春初*	*1383年春初*	○	○	*Natanzi 319*
39	第二次マーザンダラーン遠征開始	786年	1384年2月24日～	子	1384年1月23日～	△	△	Shami 94-5,Yazdi I 276
40	スルターニーヤからの帰還	787年	1385年2月12日～	丑	1385年2月10日～	△	△	Yazdi I 284

41	三年戦役開始	788年	1386年2月2日～	寅	1386年1月31日～	△	△	Yazdi I 287
42	フィールーズクーフに到着	788年	1386年2月2日～	寅	1386年1月31日～	△	△	Shami 98
43	バルダウへ出発	789年前期	1387年1月22日～	卯	1387年1月21日～	○	△	Yazdi I 298
44	*第五次ホラズム遠征*	*790年*	*1388年1月11日～*	*辰*	*1388年2月9日～*	*△*	*△*	*Yazdi I 322*
45	トクタミシュがティムールに向けて出兵	790年後期	1388年1月11日～	辰冬初	1388年2月9日～	○	○	Yazdi I 332
46	シル河を渡る	791年ラビーウI月	1389年2月28日～	巳	1389年1月28日	○	△	Yazdi I 334
47	サマルカンドへ出発	791年シャアバーン月15日日曜日	1389年8月9日	巳	1389年1月28日	○	○	Yazdi I 349
48	*クリルタイ召集*	*792年*	*1389年12月20日～*	*午春*	*1390年春*	*○*	*○*	*Yazdi 352*
49	クンドゥズチャの戦い	793年ラジャブ月15日昼	1390年6月18日	未	1391年2月5日～	○	○	Natanzi 348
50		793年ラジャブ月15日 月曜日昼	1391年6月18日	未	1391年2月5日～	○	○	Yazdi I 381
51	サマルカンドへの帰還	794年	1391年11月29日～	申	1391年12月25日～	△	△	Yazdi I 401
52	五年戦役開始	794年ラジャブ月	1392年5月24日～	申	1391年12月25日～	○	○	Shami 125-6
53		794年ラジャブ月15日金曜日昼	1392年6月8日	申	1391年12月25日～	○	○	Natanzi351,Yazdi I 405
54	マーザンダラーンを出発	*795年サファル月24日木曜日昼*	*1393年1月9日*	*酉*	*1393年2月12日～*	*×*	*×*	*Natanzi 352*
55		795年サファル月24日木曜日昼	1393年1月9日	酉	1393年2月12日～	×	×	Shami 129
56	シーラーズへ出発	795年ラビーウII月25日 月曜日昼	1393年3月10日	酉	1393年2月12日～	○	×	Yazdi I 428
57	ジュワイムに到着	795年ジュマーダーI月14日金曜日	1393年3月28日	酉	1393年2月12日～	○	○	Yazdi I 433
58	バグダードへ出発	795年シャウワール月13日金曜日昼	1393年8月22日	酉	1393年2月12日～	○	○	Yazdi I 449
59	ティクリート征服	〈796年〉ムハッラム月25日 月曜日昼	1393年11月30日	酉	1393年2月12日～	○	○	Yazdi I 466
60	ウマル・シャイフの死	796年ラビーウI月	1394年1月4日～	酉〈冬〉	1393年2月12日～	△	○	Yazdi I 474
61	ウルグ・ベク誕生	796年ジュマーダーI月19日日曜日昼	1394年3月22日	戌	1394年2月1日～	○	○	Yazdi I 482
62	テレク河岸の戦い	797年ジュマーダーII月22日木曜日昼	1395年4月14日	亥	1395年1月22日～	○	○	Yazdi I 530
63	チェルケスへ分隊派遣	798年	1395年10月16日～	子	1396年2月10日～	△	△	Shami 162, Hafiz 119
64	冬営地を出発	798年春初	1396年春初	子	1396年2月10日～	○	○	Yazdi I 553
65	*ハマダーンを出発*	*798年シャウワール月11日月曜日昼*	*1396年7月18日*	*子夏*	*1396年2月10日～*	*○*	*○*	*Yazdi I 564*
66	アミーラーンシャーの落馬	798年秋	1396年秋	子	1396年2月10日～	○	○	YazdiII 147
67	北の園の宮殿の建設	799年ジュマーダーII月	1397年3月2日～	丑	1397年1月30日～	○	△	Yazdi I 572
68	シャールフ、アム河を渡る	799年シャアバーン月	1397年4月28日～	丑	1397年1月30日～	○	○	Yazdi I 574
69	バイスングル誕生	799年ズール・ヒッジャ月21日金曜日夜	1397年9月15日	丑	1397年1月30日～	○	○	Yazdi I 576
70	インド遠征開始	800年ラジャブ月	1398年3月20日～	寅	1398年1月19日～	○	○	YazdiII 21
71	インダス渡河	801年ムハッラム月12日火曜日昼	1398年9月24日	寅	1398年1月19日～	○	○	YazdiII 40
72	サマルカンドにおける大モスク建設	801年ラマダーン月14日日曜日昼	1399年5月20日	卯	1399年2月7日～	○	○	YazdiII 144
73	七年戦役開始	802年ムハッラム月8日水曜日昼〈秋初〉	1399年9月10日	卯	1399年2月7日～	○	○	YazdiII 153
74	*グルジスターン遠征のためのクリルタイ召集*			*辰卯*	*1400年初め*			*YazdiII 170*
75	アレッポ到着	〈803年〉ラビーウI月9日木曜日昼	1400年10月28日	辰	1400年1月27日～	○	○	YazdiII 211
76	ダマスカス郊外の戦い	803年ジュマーダーI月19日火曜日	1401年1月5日	辰	1400年1月27日～	○	○	YazdiII 234
77	ダマスクスを出発	〈803年〉シャアバーン月4日土曜日昼	1401年3月20日	巳	1401年1月15日～	○	○	YazdiII 249
78	カラ・バーグに到着	804年ラビーウII月22日火曜日	1401年11月29日	巳	1401年1月15日～	○	○	YazdiII 273
79	ムハンマド・ジューキー誕生	804年ラマダーン月24日金曜日	1402年4月27日	戌	〈午〉1402年2月3日	×	×	YazdiII 285
80	アンカラの戦い	804年ズール・ヒッジャ月19日金曜日昼	1402年7月20日	午	1402年2月3日～	○	○	YazdiII 314
81	ムハンマド・スルターンの死	805年シャアバーン月18日 月曜日	1403年3月12日	未	1403年1月23日～	○	○	YazdiII 351
82	サマルカンドへ出発	806年ラマダーン月10日 水曜日	1404年3月22日	申	1404年2月11日～	○	○	YazdiII 402

ing the period followed the system of the Jin dynasty.

The Modification of the Twelve-animal Cycle in the Cultural Sphere of Literary Persian: A Consideration of the Twelve-animal Cycle of the Timurid Period

by

ISAHAYA Yoichi

The Mongol invasion of early thirteenth century had an enormous impact on the cultural sphere of literary Persian. This impact ranged over various realms, from the political to the cultural. However, the Turko-Mongolian invaders were also influenced by Iranian elements characteristic of this sphere. Therefore, the interaction between Turko-Mongols and Iranians has been regarded as a crucial factor in the consideration of the history of this sphere after the Mongol invasion.

This paper examines the conflation of Turko-Mongolian and Iranian elements from the standpoint of time measurements, and the focus of this paper is the twelve-animal cycle. Due to the conflation of Turko-Mongolian and Iranian elements, time measurements in this sphere were modified. This fact is embodied most clearly in the twelve-animal cycle. The twelve-animal cycle had first been used to represent years in the Mongol imperial calendar, which was based on the Chinese calendrical system (animal years). Therefore, the beginning of each animal year fell on Li-chun (立春), which marks the start of the year in the Chinese calendar. However, the start of animal years was moved to align with Nawrūz, the beginning of the Iranian year, which was fixed to the Vernal Equinox at that time. By tracing the process of this modification and examining this factor, we can elucidate one aspect of the interaction between Turko-Mongols and Iranians.

From previous studies, we know that the animal years of the Timurid period (1370-1507), during which the conflation of Turko-Mongolian and Iranian elements is found in its most characteristic form, are important for exploring this modification. Surveying animal years in Timurid sources, we can conclude that the nature of the animal years of the reign of Timūr (1370-1405), the founder of the dynasty, differs from that during and after the reign of Šāhrux (1409-1507), his de facto successor.

By taking animal years usually written alongside Hijrī dates from narrative his-

tories of the reign of Timūr and converting both into the equivalent Christian dates, we can investigate whether the start of the animal years of the reign of Timūr fell on Li-chun or the Vernal Equinox; as a result we see that in nearly every source the Hijrī dates and animal years do not correspond perfectly, but only in the *Ẓafar-nāma,* compiled by Šaraf al-Dīn 'Alī Yazdī, are there no mistakes if the conversion to animal years is assumed to have begun on Li-chun. The dates of Yazdī's *Ẓafar-nāma,* in which animal years began on Li-chun, are accurate, and animal years beginning on the Vernal Equinox do not appear in other sources from this period. From these facts, it can be seen that animal years in narrative histories during the reign of Timūr began on Li-chun.

A consideration of the animal years from the reign of Šāhrux onward makes clear that the nature of animal years of this period differs from that of the previous period and provides valuable information on this modification. In the animal years of this period, there are two points that can help us understand the reason behind this modification. First of all, Ibn Šihāb, the author of *Jāmi' al-Tawārīx-i Ḥasanī,* which was written after the death of Šāhrux, and in which the animal year is used more frequently than in the other sources of the period, clearly mentioned that the animal year began on the Vernal Equinox. Secondly, the animal years of this period sometimes appeared as the financial year in connection with the word māl, or the land tax. Taking into account these two points, we can infer that there was a change and the animal years of this period began on the Vernal Equinox and financial matters influenced this modification.

The connection of animal years with financial matters is found in documents; concretely in decrees issued in the name of the rulers of the Timurid period. The Turko-Mongolian rulers used animal years in decrees concerning taxation, while Iranian bureaucrats collected taxes according to the Xānī calendar in which the year began on the Vernal Equinox. This is, in fact, the reason that the start of the twelve-animal cycle was modified. As the situation continued, Iranian bureaucrats gradually "realized" that animal years began on the Vernal Equinox when tax collection was actually started. This understanding was first reflected in *Jāmi' al-Tawārīx-i Ḥasanī* written by a member of the *dīwān* of the dynasty. With the diffusion of the celebration of Nawrūz among the Turko-Mongols, the animal years were thereafter regarded as marking the beginning of the year on the Vernal Equinox among all people in the cultural sphere of literary Persian.

The twelve-animal cycle introduced by Turko-Mongols was linked with the start of the Iranian year and thereby became the measure of time of the people of in the cultural sphere of literary Persian, regardless of ethnic origin, whether Turko-Mongol or Iranian. This fact reveals that the structure of the Timurid administra-

tion in which Turko-Mongols and Iranians interacted with each other played a vital role in cross-cultural contact between them.

Economic Concepts after the Sino-Japanese War: Kaneko Kentaro's *Kogyo rikkoku koso* and the Development of the Theory of Introduction of Foreign Capital

by

NAKAMOTO Takatoshi

In this study I analyze Kaneko Kentaro's conception of the nation state as well his conception of and plan for the economy and the development of his theory of the introduction of foreign capital after the Sino-Japanese War. As a result, it has become clear that Kaneko had advocated a "plan for an industrial state" after the Sino-Japanese War with the U.K. serving as the ultimate goal, but with the dispatch of forces to police newly opened ports in China as a turning point, Kaneko proposed actively pursuing special privileges and rights within China and exporting industrial products as part of the plan of "exporting to Ching markets."

I also argue in this study how Kaneko's "plan for an industrial state" was further developed due to the financial depression following the Sino-Japanese War and demonstrate how, in addition to "export to Chinese markets," he adopted an economic plan to alleviate capital shortages by introducing foreign capital. Combined with his "plan for an industrial state," its major aim was to establish "global industrialization" by expanding large-scale foreign trade and mechanical industrialization and the development of an industrial bank to maintain infrastructure. Moreover, I emphasize the fact that the aim of developing an "industrialized world" by the active import of foreign capital differed from the mainstream of the Ministry of Finance, and that Kaneko's economic policy assumed that the growth of the private economy should be the first priority.